様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月１５日現在

研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2006～2008
課題番号：　18530620
研究課題名（和文）　近代沖縄における教育実践史に関する実証的研究

研究課題名（英文）　A Historical Study on Educational Practice in Modern Okinawa

研究代表者
近藤　健一郎（KONDO KENICHIRO）
北海道大学・大学院教育学研究院・准教授
研究者番号：80291582

研究成果の概要：　本研究は以下の諸点において従来の近代沖縄教育史研究を発展させた。第一に標準語教育実践に関して、方言札の出現時期とその歴史的意義、また発音矯正が全県的な教育課題となる契機と過程を明らかにした。第二に宮良長包に関して、沖縄の音楽教師の系譜の中に位置づけ、また彼の作詞作曲した「発音唱歌」（１９１９年）の教育実践上の特質を明らかにした。第三に沖縄県初等教育研究会の討議内容を通史的に明らかにした。さらに、沖縄県教育会機関誌『沖縄教育』（１９０６～１９４４年）の悉皆的な収集においても成果を収めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,500,000	0	1,500,000
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：　教育学（教育史学）
科研費の分科・細目：　教育学・教育学
キーワード：　近代沖縄　方言札　発音矯正　唱歌・音楽教育　宮良長包　沖縄県初等教育研究会　沖縄県教育会　『沖縄教育』

１．研究開始当初の背景

(1)研究代表者は、琉球処分から沖縄戦時下に至る近代沖縄（１８７０年代から１９４５年）における教育政策とその実態を通史的に解明してきており、その成果を『近代沖縄における教育と国民統合』として集成した（北海道大学出版会、２００６年）。本共同研究は、その研究成果を基盤としつつ、近代沖縄における教育を学校、教室の水準での教育実践史として解明しようとする研究の一部である。研究にあたっての関心は、沖縄において児童生徒に対してどのような標準語教育がなされたのか、そこではどのように沖縄語が取り扱われていたのかを明らかにすることにある。それは、どのような言葉を話すのかというきわめて個人的なことこそが近現代沖縄教育の重要な課題であり続け、その過程において自らの言葉を禁じられ、あるいは

自らの言葉を律していく歴史は、沖縄の人々にとっての国民国家日本の具体的な立ち現れ方であること、その具体像を明らかにしていくことは近代沖縄における教育の特質を鮮明なものとしていくことになるであろうとの展望に基づいている。

(2)現在までになされてきた沖縄における標準語教育に関する実証的な研究の特徴として、琉球処分直後あるいは１９４０年の方言論争前後を中心とした特定の時期を対象とするにとどまっていること、また史料上の制約が大きいとはいえ言説の解明が中心となっていることを指摘できる。それゆえに沖縄の人々にとっての近代教育の意味を問おうとする研究においては、沖縄における教育政策、また学校教員をはじめとした教育言説と、学校で学ぶ人々との接点にあたる教育実践の解明によって、教育政策とその実態の乖離を描出することが求められよう。通史的な解明によって時期区分論も含めそれぞれの時期の特徴を明らかにしつつ、実態を描く教育史叙述を行なうことをめざしたい。

２．研究の目的

上述したような研究背景に基づいて、研究代表者が標準語教育に焦点をあて近年継続的に行なってきた調査研究を以下の諸点で発展させることが本研究の目的である。

(1)第一に、沖縄県教育会機関誌『沖縄教育』（１９０６～１９４４年）などの同時代史料に基づいて、標準語教育実践の実態とその論理を明らかにし、「教えと学び」の総体として教育実践史を通史的に解明することである。ここでは、これまで研究代表者が児童生徒の回想記に基づいて明らかにしてきた学びの実態と架橋していくことをめざしている。なお本研究期間では、１９００～１９１０年代を対象とし、それ以降については本研究に継続する課題としたい。

(2)第二に、特定の教師に注目して、その教育実践とその論理を解明することである。これにより、標準語教育実践を国語科にとどめず、唱歌科などの他教科はもちろん、さらに将来的には社会教育を含む教育実践一般に広げていくことを展望するものである。本研究期間では、宮良長包に着目して研究を進める。

(3)第三に、近代沖縄教育実践史研究の基礎として、沖縄における教員組織のありようとその動向を解明することである。本研究期間では、沖縄県内全小学校を網羅して組織され、教育実践について議論していた沖縄県初等教育研究会に注目し、その組織形態や活動などの基礎的事項を明らかにし、今後の研究基盤を築くことをめざして研究を進める。

３．研究の方法

(1)本研究は、上述の目的に対応する課題を次のように構造化して進めるものである。第一の標準語教育実践の実態とその論理の解明が本研究の中軸をなす。その特殊研究として、第二の個々の教師による教育実践史の解明が位置づいている。そしてそれらの土台としての位置を占めているものが、教師を取り巻く教育界の状態を明らかにすることをめざす、第三の教員団体史の解明である。具体的な課題とその方法は以下の通りである。

①近現代沖縄において標準語を普及しようとする政策のもとで展開した、それぞれの集落で話されてきた言葉を否定することを伴う教育の実態を明らかにするために、方言札に注目する。

これまで方言札に関する体験については、１９５０年代半ば以降多く語られ、記されてきた。しかし、方言札が存在することについては、沖縄人の社会的自覚（外間守善）やアイデンティテーの転換（井谷泰彦）との関連での指摘はあるけれども、なぜそのような体験をしなければならなかったのかは明らかではない。

このような状況から本研究期間では、まずいつ頃、なぜ方言札が出現したのかを明らかにする。そのための方法として、第一に体験者の回想から方言札はいつ頃には確実にあったのかを明らかにする。そして第二に方言札が学校に導入されている状況では、その学校の教員集団はすべて標準語で話すべきだという価値規範をもっていると考えられ、授業時間において沖縄語を用いている状況では方言札は存在しえないといえるから、そのような時期を特定して方言札の不存在時期を明らかにする。

②近代沖縄においては、ただ「正しい」言葉としての標準語が教えられ、「誤った」言葉として沖縄語が抑圧されたにとどまらず、「正しい」発音に意が注がれていたことにも留意しなければならない。発音矯正にも視野を広げることが必要である。

近代沖縄における発音矯正に関する研究は本永守靖による史料整理・紹介（１９８４）があるものの、その描出は未開拓であるとの

研究状況に基づいて、沖縄における発音矯正教育の展開を課題とする。

本研究期間では、「正しい」言葉を話すこと、教えることに注意が向けられていく過程を明らかにする。本永の史料整理をふまえると、１８９０～１９１０年代にそのような過程をたどるのではないかと考えられるため、その時期を対象とし、主に新聞『琉球新報』や教育会雑誌『琉球教育』『沖縄教育』から得られる取り組みを整理する方法をとる。

③沖縄県内の最高学府であった沖縄県師範学校及び同附属小学校に在職した音楽教員に焦点をあて、その系譜を明らかにする。

近代沖縄の音楽教員に関する先行研究は、１９２１年から１９３９年まで師範学校に音楽教員として在職した宮良長包についてのモノグラフを積み重ねてきた。そこでは宮良長包の音楽活動が、近代沖縄社会の先駆的なものとして評価されている。今後の研究に求められることは、宮良長包の活動以前の年代についても解明し、彼の業績を相対的に評価することである。

以上をふまえて、音楽教員として勤務したのは誰であり、その人はどのような音楽活動を行なったのかを、教育会機関誌『琉球教育』『沖縄教育』を主な史料として通史的に明らかにする方法をとる。

④宮良長包の作品の一つに「発音唱歌」がある。この作品は、沖縄人児童の発音矯正を行なおうとして、仲西尋常高等小学校長となった宮良長包が１９１９年に作詞作曲したものである。宮良長包の執筆した標準語教育論、唱歌教育論の考察を通じて教育実践としての「発音唱歌」の特徴を明らかにする。

これまで作曲家あるいは音楽教員としての宮良長包に注目した研究が積み上げられてきた。それに対して、唱歌のもつことばの教育の側面に留意した研究は着手されたばかりであり（三木健、２００４）、彼の教育方法について論じるにとどまっている。

その状況ゆえに、宮良長包の記した標準語教育論を中心にしつつ音楽・唱歌教育論をも、教育目的と関連づけて考察を行なう方法により、唱歌を用いた発音矯正という教育実践の特徴を明らかにする。

⑤沖縄県初等教育研究会について、その討議内容がどのように推移したのかの事実関係を明らかにする。

先行研究の動向ならびに回想録の現況をふまえて、沖縄県初等教育研究会の討議内容の推移また組織については、その事実関係がこれまでにも一定程度は明らかにされてきたものの、通史的な視野をもって分析した研究はこれまでに提出されてはいない。しかも、同研究会と教育会との関係、また同研究会の組織運営の実態をはじめとして基礎的な事実関係についてすら不明の点が幾多も残されている。したがって、初等教育研究会にかかわる基礎的な事実の解明、およびその根拠となる史料調査は依然として大きな課題である。

これらの点に鑑みて、まず同研究会にかかわる新聞、雑誌、書籍、公文書などの史料を渉猟し整理する方法により、討議内容の推移を中心とした基礎的事実を明らかにする。

(2)本研究における最も基本的な史料として着目し活用するものが、沖縄県内の学校教員、学務担当者、会に賛同する有志によって構成される沖縄県教育会が刊行し続けた機関誌『沖縄教育』である。そこには教育に関する教員や学務担当者による論説ばかりでなく、教授細目や授業記録及び批評会記録のような教育実践状況を明らかにする手がかりとなるような記録、また知事などの訓示や校長会記録など教育政策動向を明らかにする手がかりとなる史料などが掲載されている。現在の研究状況を省みるとき、『沖縄教育』に掲載されているこれらの記事の整理分析はまず為されなければならないことである。ただし、『沖縄教育』は現時点において散逸が激しいうえに、所蔵機関も全国に分散しており、史料として活用するための前提として調査収集が先立つ状態にある。そのため、本研究においても研究の基礎的作業として、『沖縄教育』の悉皆的調査を行ない、総目次を作成することも課題とする。

４．研究成果

(1)方言札の出現時期は１９００年代前半であることを明らかにできた。それは、１９００年代前半に方言札を体験したという回想記録が得られたのみならず、当時の授業記録によれば１８９０年代後半までは標準語と沖縄語とを対訳で用いていることから、方言札は出現することはありえなかったと考えられることによるものである。

１９００年に師範学校は、標準語習得と一対のものとして沖縄語使用を禁じることを教員になっていくものの心得とした。それを政策背景としつつ、大和人教員が沖縄語を退け撲滅しようと主張した一方で、沖縄人教員は差別からの脱却という意味をもって沖縄人の標準語習得をめざし、それと一対のものとして教授用語として沖縄語を用いないこ

とを考えた。アイデンティティーの転換という問題ではないのであり、大和人教員と沖縄人教員とが標準語普及という点では一致しながらも意図において明確な差異を伴いつつ、沖縄語が当然にも使われている学校空間に方言札は出現した。

(2) １８９０年代半ば、沖縄における教育政策は発音矯正を課題として発見した。それが具体的に取り組まれるのは、１９００年代前半から中盤にかけてであり、まず教員自身が発音を矯正し模範を示すことから始まった。そして科学的な知見に基づいた発音矯正に取り組むことのできる基盤をもたらしたのは、東京帝国大学で言語学を学んだ伊波普猷が１９０９年に開始した声音学講演であった。ここで決定的なことは、１９１１年に文部省視学官小泉又一が視察を行ない、沖縄における学校教育の問題点として発音矯正に言及したことである。小泉の講演を聴いた小学校長たちが、発音矯正を教育課題の一つとして受け止めただけではない。沖縄県知事も教育課題の一つと位置づけた訓示を行なった。そのもとで、沖縄教育会が『沖縄教育』を通じて、また伊波普猷が声音学講演を通じて、さらに附属小学校も研究会開催等を通じて、発音矯正に必要な声音学や口形図という科学的知見や、発音矯正を実施する方法や情報を伝えていったのであった。

(3)師範学校の音楽教員教諭のポストには基本的に、沖縄県外出身の教員が配属されており、同ポストに県出身の宮良長包が在職した期間（１９２１年～１９３９年）は例外的であった。また師範学校附属小学校訓導のポストには、少なくとも１９０３年以降つねに沖縄人の教員が配属されていた。そして女子師範学校では、師範学校教諭と同様に、県外出身の教員が配属されている。以上から、音楽について沖縄人教員の配属は、師範学校附属小学校訓導に限定されていたと結論づけられよう。
近代沖縄の教育音楽界では、明治３０年代の教員によって唱歌教育をおこなう土壌が耕され、明治４０年代に園山民平によって、唱歌にとどまらない幅広いジャンルの音楽を享受する価値観がもたらされた。そういった音楽観は、園山から直接の感化を受けた大正期の教員たちに引きつがれ、さらに昭和初期の郷土教育期には宮良長包を中心に、郷土の民謡に目を向けた音楽教育活動が実践されていた。

(4)宮良長包は、すでに八重山で小学校教員であった１９１１、１２年において、口形図についての知見を持ちあわせ、唱歌教育を論じるなかにあって国語科と結びつける萌芽を見せていた。１９１５年に長包は附属小学校の一員となり、沖縄教育界の「普通語励行」という大方針のもと、子どもたちが入学１～２ヶ月以降は標準語のみで話すようになることを目的として、唱歌教育と国語科とを関連づけた。そのうえで長包は、子どもたちの「誤りやすい」発音実態をふまえ、歌うという子どもたちの興味を活用し、「正しい」発音へと矯正する入門的な教育実践をすべく、発音に注意しなければ歌えない歌詞と尋常小学校入学当初の子どもたちも歌えるような曲として「発音唱歌」を作詞作曲した。
　発音矯正を担う主要な教科と見なされていた国語科と唱歌科が結びつくことがなかった状況において、長包はそれらを結びつけたことに最大の特徴がある。長包にとって標準語のみで話すようにするということは与件であったため、彼の特徴はそれを具体化するための「正しい」発音を楽しく歌うことにより習得するという教育方法に現れたのである。

(5)沖縄県初等教育研究会に関して、これまでの調査研究では明らかにされていなかった点を埋めつつ、討議内容の推移を解明した。
　各回の開催状況について、１９１５年の第１回から１９４２年の第３１回までほぼ１年に１回開かれていたことを明らかにした。
　また各回の討議内容については、第１回の「国語科」「理科」から第３１回の「国民学校教育実践に関する研究」まで、その時々の喫緊の課題を沖縄県師範学校、沖縄県女子師範学校が交互に討議内容として決定し、研究会を開催していたことを明らかにした。

(6)本研究において、これまで知られていたよりも、新たに１１号分の『沖縄教育』を発見し、それも加えて総目次を作成することができた。総目次については、北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）で公開する。また収集した『沖縄教育』については、２００９年秋から数年かけて不二出版より順次復刻する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）
①藤澤健一、「沖縄県初等教育研究会」の基礎的研究－討議内容に関する分析を中心に－、近藤健一郎編『近代沖縄における教育実践史に関する実証的研究』（科学研究費補助金研究成果報告書）、２００９年、１０１～１３６頁、査読無。
②近藤健一郎、『沖縄教育』総目次（２００９年２月現在）、近藤健一郎編『近代沖縄における教育実践史に関する実証的研究』（科学研究費補助金研究成果報告書）、２００９年、１３７～２２１頁、査読無。
③近藤健一郎、宮良長包作詞作曲「発音唱歌」（１９１９年）とその周辺（下）－発音矯正教育に関する歴史的視点から－、沖縄国際大学南島文化研究所『南島文化』第３１号、２００９年、印刷中、査読有。
④梶村光郎、児童新聞『児童の産業』から見えるもの、琉球大学ことばと教育研究会『ことばと教育』第３号、２００９年、印刷中、査読有。
⑤三島わかな、近代沖縄における音楽教育観の変遷－雑誌『琉球教育』『沖縄教育』の分析を通して－、沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学専攻『ムーサ』第１０号、２００９年、６５～８０、査読無。
⑥三島わかな、明治期沖縄の音楽会プログラムにおける「民謡」概念の形成、沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学専攻『ムーサ』第９号、２００８年、８７～９９頁、査読無。
⑦三島わかな、沖縄音楽の近代化と園山民平、『沖縄県立芸術大学紀要』第１６号、２００８年、１５７～１７８頁、査読無。
⑧三島わかな、近代沖縄における五線譜の受容－宮良長包の民謡採譜を中心に－、沖縄文化協会『沖縄文化』第１０２号、２００７年、９３～１３０頁、査読有。
⑨近藤健一郎、宮良長包作詞作曲「発音唱歌」（１９１９年）とその周辺（中）－宮良長包の教育論考に注目して－、沖縄国際大学南島文化研究所『南島文化』第２９号、２００７年、１９７～２１３頁、査読有。
⑩三島わかな、数字譜から五線譜へ－近代期沖縄の読譜指導の実態－、『沖縄県立芸術大学紀要』第１５号、２００７年、１０９～１２６頁、査読無。

〔学会発表〕（計４件）
①三島わかな、“唱歌”から“音楽”そして“民謡”へ－雑誌『沖縄教育』『琉球教育』にみる音楽観の変遷－、日本音楽教育学会第３９回全国大会、２００８年１１月８日、国立音楽大学
②三島わかな、明治期の沖縄における洋楽の受容－音楽会における洋楽と在来音楽の位置づけをめぐって－、日本音楽教育学会第３８回全国大会、２００７年１１月１０日、岐阜大学
③近藤健一郎、近代沖縄における発音矯正の教育史、多言語社会研究会第９回沖縄例会、２００７年９月１６日、沖縄県女性総合センター
④三島わかな、民謡の五線採譜化と音楽創作－近代沖縄における宮良長包の取り組みを中心に－、日本音楽学会第５７回全国大会、２００６年１０月２８日、九州大学

〔図書〕（計３件）
①藤澤健一（編著）、社会評論社、反復帰と反国家、２００８年、全２２７頁。
　＊藤澤健一、国家に抵抗した沖縄の教員運動、７７～１０３頁。
②近藤健一郎（編著）、社会評論社、方言札、２００８年、全２１５頁。
　＊近藤健一郎、近代沖縄における方言札の出現、１７～５２頁。
　＊三島わかな、近代沖縄における公開音楽会の確立と音楽観、８９～１２２頁。
③屋嘉比収・近藤健一郎・新城郁夫・藤澤健一・鳥山淳（編著）、社会評論社、沖縄に向き合う、２００８年、全２３７頁。

〔その他〕
①史料発見の新聞報道。長包の「献穀田田植歌」発見　石垣市の瀬名波さん宅、『琉球新報』２００７年6月２日付。

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤　健一郎（KONDO KENICHIRO）
　北海道大学・大学院教育学研究院・准教授
　研究者番号：80291582

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
梶村　光郎（KAJIMURA MITURO）
琉球大学・教育学部・教授
研究者番号：70255016

藤澤　健一（FUJISAWA KENICHI）

福岡県立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：00301812

(4)研究協力者
三島　わかな（MISHIMA WAKANA）
沖縄県立芸術大学・音楽学部・非常勤講師